
紅と白の魔術師譚

ヴァニタス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

紅と白の魔術師譚

【Nコード】

N37150

【作者名】

ヴァニタス

【あらすじ】

2XXX年。世界中にモンスターたちが溢れかえっている時代。魔術師組合、通称ギルドと呼ばれる組織にはその名の通り何人もの魔術師たちが所属していた。彼らは依頼された任務をこなし、その報酬によって生活していた。

このギルドに所属する少年・吉瀬十夜はある日とある依頼で出掛けるところ一人の少女と出会った。

この二人の少年と少女の出会いで物語は幕を開けた。

1 - (1) 魔術師は魔物を狩る

「おおー、えらく殺気剥き出しだねー」

見渡す限り一面砂に覆われた砂漠。そんな場所で自分の周囲をぐるりと見回しながら吉瀬十夜は呟いた。十夜の言うとおり、彼の周りにいる生物は十夜に対して殺気を剥き出しにしていた。

それでは十夜はどこにいるのか。

肉食動物の群れが暮らす動物園の檻の中か。何十匹という鮫たちが自由に泳ぎ回る水族館の水槽の中か。はたまた古代に生息していた生き物たちの王者、恐竜のいる時代にタイムスリップしてティラノサウルスやアロサウルスといった肉食恐竜に囲まれているのだろうか。

答えはそのどれでもなかった。

十夜の周りを取り囲んでいるのは『魔物』だった。魔物、というとゲームやアニメ、とにかく空想の世界に生息する架空の生き物を想像するだろうが、まさしくそのことだった。

言ってみれば恐竜が一番近いだろう。ただ、恐竜と魔物で明らかに違う点があった。

それは。

「うおっ！」

一匹の猪のような二足歩行の魔物がその手にもっている剣を振り回しながら斬りかかってきた。獣人種と呼ばれる魔物、オークだ。十夜は即座に反応し、間一髪ではあるがオークの攻撃を避けた。

屈んだ体の頭上を剣が風を裂く音をたてながら通過していった。

だが、『武器』とはいつたがなにも剣やハンマー、斧といったものばかりではない。

十夜が屈むのを読んでいたかのように轟々という空気を燃やす音をたてながら巨大な火球が向かってきた。十夜は後方に跳んで再び攻撃を避ける。

これが恐竜等の肉食獣と魔物の明らかに違う点だった。魔物という奴らは人間と同じように剣やハンマーは勿論、火球や雷など普通の人間には到底使う事の出来ないような技まで持ち合わせているのだった。

だが、そんな魔物たち相手に何の技も持っていないような一般人が剣も持たずに挑んでいくわけがない。その点、十夜も魔物が普通の生き物と違うように、普通の人間とは違う力を持っていた。それは。

「炎よ……鋭き槍の形して敵を貫け。炎の槍！」
フレイムランス

十夜が一体のオークに人差し指を向けそう呟くと同時に指先から炎が迸った。その炎は細く鋭い槍の如く一直線に魔物に向かって放たれた。炎の槍は茶色い毛皮に覆われたオークの体をまるで豆腐に爪楊枝を刺すかのようにいと簡単に貫いた。槍はオークの体を貫いた後、尚もそこに止まり、その熱でオークを苦しめる。

体を貫かれるだけでなく、普通に触れば大火傷してしまうような高温の槍をその身に置けばその巨体も毛皮も関係ない。オークは苦しそうに暴れ回ったが一瞬体をビクンと振るわせたのを最後にその場に崩れ落ちた。

これが十夜の身に宿る普通の人間とは違う『力』だった。十夜は魔術師なのだ。

魔術師というところれも空想の世界を連想してしまいが、これは突如襲来した魔物に対抗するための人類の最終手段だったのだ。人類は魔物が世界に現れたばかりの頃は、その猛攻にただただ耐えることしかできなかった。が、数年に及ぶ研究のおかげで魔術の可能性を見出し、そしてその研究を完成させたのだった。

そして十夜もその魔術師の一人だった。その身に宿っているのは『炎』の力。その中でも十夜は強力な魔術を操るため、彼を知る他の魔術師からは『紅蓮の破壊者』とも呼ばれている。

そんな彼がこんな魔物たちの巣窟ともとれるような場所に来た理由はとある依頼を受けたからだ。

十夜は魔術師組合と呼ばれる場所に所属している。魔術師組合は魔物たちに対抗するための一介の組織のことで、世界中に置かれている。この組織には多くの魔術師が所属して、一般人からの依頼をランク別に分けてそれを受注しこなすのが魔術師たちの仕事なのだ。因みに魔術師たちにもそれぞれランクがあり、そのランク別に下級魔術師、中級魔術師、上級魔術師、そしてこの魔術師の頂点に立つ者のことを大魔術師と呼ぶ。その中でも十夜は上級魔術師に当たる実力を持つ。

と、オークの死を目の当たりにした他の魔物たちはより一層殺気を強めた。そして、十夜に攻撃の暇を与えないとばかりに一気に攻撃を仕掛けてきた。

オークが剣を振り回せば、牡山羊とも呼ばれる獅子、山羊、蛇の合成魔獣であるシメールが火炎を吐き散らす。他にもゴブリンやスライムといった下級の魔物たちが攻撃を仕掛けてきた。

この魔物たちの攻撃が四方八方から繰り出されて十夜はなす術なくその攻撃をその身に受けた。

かと思われた。

が、違った。

十夜の周りにまるで十夜を守るかの如く、炎の壁が取り囲んでいた。魔物たちの攻撃の直前に十夜が魔術を使ったのだ。

案の定、シメールの火炎はその壁を打ち破るところかより一層威力を強め、さらにオークやゴブリンといった直接攻撃を仕掛けたものはその炎に触れ大火傷を負った。辺りに様々な魔物の悲鳴が響く。

「そろそろ終わらせるか……」

苦しむ魔物を余所に、十夜はそう呟くと両の掌を地面につけた。そして、

「炎よ……灼熱の柱となり、敵の体を燃やしつくせ。灼熱の柱！」
ヒラズインフラエルノ

十夜が魔術を詠唱すると同時に、魔物たちの足元から突如数十本という火柱が上がった。魔物たちは突然のことに驚き、なす術なくその火柱に体を包まれた。

火柱が消えても尚、魔物たちの体を包んでいる炎は消えず、それから数十秒経ってから炎が消えた時には既に立って十夜を睨むものは一匹たりとも居なかった。

「これで任務完了だな」

十夜は全ての魔物を倒したのを確認するように辺りをぐるりと見回すと、魔術師である者ならばまず一番初めに覚えなければならぬといわれる空間移動魔術スプレントを使用した。これは任務を終え帰還するのに使用するのももちろん、常に死の危険と隣合わせの任務から離脱するときにも必要な魔術なのだ。

と、魔術の詠唱を始めようとしたしと瞬間、十夜の目が地面に横たわるなにかをとらえた。

十夜は警戒しながらその『なにか』に近づいていく。そして驚いた。

「ひ……ひと……なのか？」

疑問形ではあったが確かにそれは人だった。それも少女。

年齢は十夜と同じくらい。十四、五歳くらいだろうか。燃えるような紅蓮の髪に黒いフードつきローブを着ている十夜に対して、少女は腰のあたりまで伸びた長い銀髪に白いフードつきのローブという全く対照的な姿をしている。が、十夜はそんなことは気にしていなかった。

何故なら、少女はその目を瞑り、今にも途絶えてしまいそうな微かな息しかしていなかったからだ。見ると少女のローブの腹部だけが赤に染まっていた。十夜は一目でそれが何なのかが分かった。

「血……だと」

そう。それは確かに血だった。

その赤い血が少女の白いローブを真っ赤に染めていたのだ。恐らく魔物かなにかとの戦闘で受けた傷だろう。

十夜は危険を感じて辺りを見回した。彼女に怪我を負わせた何者かが辺りに潜んでいるかもしれないからだ。必死に気配を感じ取ろうとするがそんなものは全く感じられなかった。

十夜はもう一度少女に視線を戻すと、右手の掌を少女に、左手の手のひらを自分の胸のあたりにつけ、

「空間を超越し、私の思い描く場所へと導け。空間移動魔術！」
スベント

同時に十夜と少女の姿はその砂漠から消えていた。

辺りにはただただ静寂が漂っていた。

第一話 謎の青年剣士

「やれ、やつちまえ！」

「負けんな！ お前にかかってんだぞ！」

様々な怒声、罵声飛び交うのは闘技場が多いこの町の中でも、最高の観客数を誇る、ヴァナーラコロシム。

直径三十メートル程の闘技場をぐるりと観客席が取り囲むこの闘技場。戦闘が観客にまで及ばないように、強固な壁で仕切られているが、選手が壁を飛び越えて観客席に落下することは珍しくない。が、ヒートアップした客にとってそんなことは関係ないのか、観客の数は止まることを知らない。

さて、そんな闘技場の中に、今対峙している、二人の選手ファイター。

一人は、三メートル近い巨体に、その巨体に並ぶほどの巨大な薙刀。筋肉質な体型に加え、体中に鉄製の鎧を身にまとい、如何にも強そうな風貌をした、この闘技場でも人気の選手。

それに対して、もう一人の方は、身長もそれほど高くなく、筋肉もあまりついているようには見えない、黒髪の普通の青年。鎧も身に着けておらず、腰に提げている一本の刀も、巨男の薙刀に比べると、玩具のようにも見える。

「おうおう、こりゃあ、えらく小つちええ餓鬼が挑んできたもんだな……。ったく、こりゃあ、何秒で決着けりがつくかな？」

巨男の方が、青年を見下ろし、からかうように言った。

しかし、それも否定はできない。かなりの体格差があるこの二人だ。何百、何千という人がこの二人を見比べても、明らかに勝負はついている。

が、巨男のそんな言葉にも、青年は全く怯まず、真っ直ぐに巨男を見つめ返した。

「どーでもいいから、早くやろうぜ？ オッサン、この町じゃ、最強って言われてんだろ？」

青年の挑戦的な言葉に、苛立ちを覚えたのか、巨男の血管がピクリと浮き出た。と、言っても、顔も、目以外は兜で隠されているため、観客は勿論、青年にすら見えるはずはないが。

「成程、威勢だけはいらしいな……。それじゃあ、望み通りに、とっとと殺してやるよ！」

巨男は、そう怒鳴ると、手に握った巨大な薙刀を振り上げ、青年へと一気に振り下ろした。

その薙刀は、男の巨体には似合わず、かなりの速さで振り下ろされた。誰もが、勝敗は決したと思っただろう。この巨大な薙刀をあのスピードで振り下ろされて、生きているはずがない、と。

が。

「その程度か？」

「なっ　　！」

信じられないことに、背後から今まで目の前にいたはずの青年の声が巨男の耳に入った。

反射的に男は後ろへ振り向く。

そこには、先程までと変わらず、平然とした様子で構えた青年の姿があった。

「ば、馬鹿な！ 俺の攻撃を避けたというのか！」
「見りや分かるだろ、一々めんどくさいオッサンだな。じゃ、もう
終わりにするか」

そう言つと、青年は刀の柄に手をかけた。

刹那。

チン、という、刀を鞘に入れた時の金属音が響くと同時に、男の
巨体が、地面に倒れ込んだ。

観客にいる誰もが口を閉ざした。否、正確に言えば何も言えな
ったのだ。それ程、青年の刀の速さは凄まじく、観客にいる者は一
人として、その動きを目で追う事が出来なかつたのだ。

「よし、終わったな」

青年は、倒れ込んだ巨男をチラリと見下ろした後、試合中選手が
逃げ出したり、観客が入ってきたりするのを防止するために、鉄格
子で閉められた出入り口へと歩き始めた。

と、同時に観客席から数々の声が飛び交った。

それは、一か八か青年の方に賭けた者の歓喜の声と、倍率が低い
巨男の方にかけてしまったために、持ち金を全て失ってしまったも
の、落胆の声等、様々だった。

しかし、青年はそんなことは気にせず、出入り口に辿り着くと、
試合結果に驚き茫然としている門番に声をかけた。門番は、慌てた
様子で鉄格子を開けると、青年はさっさと出て行き、受付の男から
賞金をもらつと、早々に闘技場を後にした。

第一話 謎の青年剣士（後書き）

どうも、ヴァニタスです。第一話、更新しました。

しかし、見返すと本当に下手くそで、自分が恥ずかしくなってきました。

これからも、こんな感じで進んでいくので、どうかあたたかい目でご覧になってください。

第二話 墮天使

「さっきの賞金が、三百レイ。元々の持ち金が五百レイだから……。とりあえず、今月は大丈夫か」

一人の青年が、沢山の店が立ち並ぶ商店街を、札束を数えながら歩いていった。

先程、闘技場で、最強を誇っていたあの巨男を倒した青年剣士だ。

青年の名前は、クロウ・ラーズ。年齢は十六歳。この町マールに学校はないが、もしあれば高校一年生といったところだ。

容姿はというと、頭髮は所々寝癖が見られる無造作な黒髪。服装は、フード付きの黒いジャンパー。下は、右膝の所だけ破けており、長い間履いているのか、少し色の落ちた青いジーンズといった、全身、黒っぽい服装で身をつつんだ青年である。目は、透き通るようなブルーアイ。首には、十字架のペンダントをかけている。闘技場の盛んなマールでは、あまり珍しくないことだが、腰には一本の刀を提げている。

こんな、何処にでもいるような青年が、あの巨男を倒したというのだから驚きだ。

因みに、苦勞が呟いていた「レイ」というのは、この町、というかこのレイディアント王国の通貨単位である。つまり、今クロウは合計で八百レイ持っていることになる。

「さて、と。今日は何食うかなー……」

クロウはそう呟いた。

この商店街は、近くに闘技場があるため、朝晩問わず、いつもそ

の盛況ぶりを見せている。

店の種類も豊富で、地元の人曰く、この商店街に来れば揃わないものはない、らしい。

そんなわけで、今晚の食料を考えながら、ブラブラと歩いていたクロウに、突然声がかかった。

「おい、刀を提げたそこのお前」

「んあ　？」

クロウは、不意を突かれ、少々間拔けた声を出しながら振り向いた。

そこには、先程青年が倒したはずの、あの巨男が立っていた。

「おお、あのオッサンか。俺に何か用か？」

その身長差のために、クロウは男を見上げながら聞いた。先ほどもそうではあったが、クロウはこの身長差など、何でもないかのように、全く怯みもしない。

「俺はこの町でも最強と言われる男だったんだ。それをお前みたいな餓鬼のせいで……。お前は必ず俺が殺す！」

そう怒鳴ると、男は突如、背中につけていた薙刀を握ると、振り上げた。辺りにいる人々が、男の持っている薙刀を見て、悲鳴を上げながら一斉に逃げ出す。

が、男は全くそんな事を気にした様子はなく、ただただ怒りと恨みに満ちた眼でクロウを見下ろしながら、薙刀を振り下ろした。

「マジかよー！」

クロウは、男の突然の攻撃に驚きながらも、飛退いて攻撃を避けた。

男の薙刀は、コンクリートの地面に当たると、ガギン、という鈍い金属音が響いた。が、薙刀は壊れるどころか、刃毀れをすることもない。相手の込んだ、丈夫なつくりをしているのだろう。

が、今は薙刀が壊れるなどという淡い期待を抱いている場合ではない。

この商店街の一本道。男の巨体がそこに立ちふさがれば背後をとることもできない。

「チィー！」

クロウは舌打ちすると、腰に提げている刀の柄に手をかけた。

が、男は、刀を抜く暇さえ与えないとでも言うように、薙刀を何度も振り下ろしてきた。振りまわされた薙刀の刃は、至る店の屋根や看板、仕舞いには商品までもを次々に破壊していったが、男は全く気にしていない。

「死ね、死ね、死ねえ！」

男は、唾を吐き散らしながら何度も薙刀を振り下ろす。クロウも巧みに避けるが、これだけの体格差だ。避けるのと薙刀を振るのでは明らかに薙刀を振るほうが体力は消耗するが、男のかなりの巨体を見る限り、体力が底をつくの待つのは期待はできない。

「くそっ……。出来ればこんなところは使いたくはなかったが仕方ない！」

クロウは、キツ、と男を睨むと、鞘かな刀を引き抜いた。

そして、刀を天高く掲げ

「アウエイク覚醒せよ、しろがらす黒刀・白鴉」

刹那。

クロウの掲げた刀が、否　　クロウの体全体が、一瞬眩い光に包まれた。光が消えると、クロウの掲げた刀は、透き通った銀刃から、漆黒に染められた黒刀へと変わっていた。

更にクロウの体にも幾つかの変化が起きていた。まず、その美しいブルーアイは真紅に染まっていた。又、一番の違いは背中に二枚の翼がついていたことだ。刀と同じような、漆黒に染まった翼をもつクロウは、さながら神話や物語に登場する墮天使のようにも見えた。

「な、なんだ！」

これには、さすがの巨男も驚きを隠せず、後ろに二、三步退いた。

「こつなつたらもう終わりだ」

クロウは、怯えた様子の男に、哀れむような声をかけた。直後、クロウの姿が怪しく揺らいだ。

瞬間、クロウの体は閃光のように一瞬で巨男の懐に入り込むと刀で一閃した。

その刀の切れ味は歴然だった。男の強固な鎧は、まるで固まった土がボロボロと崩れ落ちていくかのように、意図も簡単に真つ二つに割れ、切っ先は男の腹部を掠めた。この巨男を倒すのにも、それだけで十分だった。

男は、声もあげず、静かにその場に倒れ込んだ。

クロウは、倒れた男を見下ろし、動けなくなっただのを確認すると、

刀を鞘に戻した。すると、クロウの体が再び眩い光に包まれ、光が消えた時には、クロウの体は元通りになっていた。

「ふう……。とんだ逆恨みだぜ……」

クロウは、迷惑そうに男を見下ろしながら眉をひそめると、身を翻して歩き始めた。

第二話 墮天使（後書き）

第二話更新です。今回は、第二話にして、やっと主人公の名前が出ました。

自分としては、今回は結構よくかけたのではないかと思います。が、まだまだ皆さまに比べれば、劣る部分も多いと思いますので、これからも頑張っていきたいと思えます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3715o/>

紅と白の魔術師譚

2011年10月8日03時15分発行